資料３－１

複合施設の基本理念、目指す施設像等

1. 複合施設の基本理念

人・文化・まちを育む創造の広場

～人と人、過去と未来、仙台と世界を文化でつなぐ～

○　文化芸術と災害文化、このいずれの『文化』も『人』が創り出し、『人』と『人』との交流の中で継承され発展していくものです。

○　『人』が育つことによって『文化』が育ち、『文化』の力によって『まち』全体がより豊かなものに育っていきます。本施設はそうした営みの中心・拠り所となることを目指すことから、『人・文化・まちを育む』を基本理念の中に掲げます。

○　この営みの基底となるのは、多くの人々が主体的に参画する『創造』の行為です。本施設は全ての人に開かれた新しい『広場』として、いつでも気軽に訪れ、憩い、交流を通じて創造的取組の輪が広がっていく場となることを目指します。こうした施設のあり方を、『創造の広場』という言葉で表します。

○　さらに、『文化』は言語や距離を超えて『人』と『人』とを巡り合わせ、絆を生み出す役割も果たします。

○　また、３．１１を起点に持つこの複合施設は、数々の災害を乗り越え生きてきた人々の営みをはじめ、先人たちの文化芸術活動の足跡など、様々な『過去』にまなざしを向け、今を生きる人の糧とし、それをより良い『未来』づくりに生かしていくことのできる施設になる必要があると考えます。

○　『文化』が持つ、隔たったもの同士をつなげる架け橋としての役割を活かし、仙台だからこそ生まれた『文化』をこの施設から発信することにより、『世界』とつながることのできる施設となるよう、『人と人、過去と未来、仙台と世界を文化でつなぐ』という副題とします。

2. 複合施設として目指す施設像

この基本理念の下に３つの「目指す施設像」を掲げ、施設全体の管理運営や音楽ホール・中心部震災メモリアル拠点の事業運営を行っていきます。

【複合施設の基本理念・目指す施設像】

基本理念

人・文化・まちを育む創造の広場

～人と人、過去と未来、仙台と世界を文化でつなぐ～

目指す施設像

❶**「多くの人が訪れ、交流し、新しい価値を創造する場」**

多くの人が気軽に・自由に訪れ、新たな価値に出会うことができ、多様な交流が次の創造的取組みへとつながり地域に新しい価値を広げていく。

❷**「仙台を知り、磨き、仙台オリジナルの発信につなげる場」**

全国的にも例を見ない文化芸術と災害文化の複合施設として仙台を「知る」原動力となるとともに、都市個性を高め、国内外に向け「仙台オリジナル」の文化の発信を行っていく。

❸**「ネットワークを形成し、市内外から人が訪れたくなる場」**

青葉山エリアに立地する特性を生かし、周辺施設との有機的な連携のもと、仙台の文化観光の拠点として広域から人を呼び込み、まち全体に活気をもたらす。

複合施設の管理運営

音楽ホールの事業運営

中心部震災メモリアル拠点の事業運営

3. 複合施設として目指す施設像の具体化

音楽ホールと中心部震災メモリアル拠点の親和性を生かすとともに、青葉山エリアに立地する施設という位置づけを踏まえ、以下のような考え方により「複合施設として目指す施設像」の具体化に取り組んでいきます。

（複合施設として目指す施設像）

❶
「多くの人が訪れ、交流し、新しい価値を創造する場」

（具体化に向けた考え方）

【施設全体】
○　文化芸術目的の来館者、災害文化目的の来館者が、互いの分野に興味を抱けるような仕掛けを講じ、新たな出会いや交流が生まれる施設を目指します。
○　屋外の広場やエントランスをはじめ、施設の様々な空間を活用し、施設全体が多様な目的を持った人々で賑わう「新しい広場」となることを目指します。
○　文化芸術、災害文化を有機的に結びつけることのできる担い手を育成・支援し、新たな価値が生まれる土壌を作ります。
　⇒参考：これからのコーディネーター像について

【音楽ホール】
○　特定の文化芸術に趣味を持つ人だけが集まるのではなく、年齢、障害の有無、国籍、社会的背景等に関わらず誰もが気軽に訪れ、多様な糸口からの文化芸術体験を通じて、人と人との繋がりや新たな価値の発見がもたらされる場を目指します。
○　多様な人々が集まる拠点となり、その中から文化芸術・まちづくりの次世代の担い手が育つような施設を目指します。

【中心部震災メモリアル拠点】
○　被災体験の有無に関わらず、一人でも、グループや家族連れでも、気軽に訪れ、交流し、災害文化に触れることのできる場づくりを行います。
○　東日本大震災の経験と教訓の伝承活動の担い手同士の連携と協働を支援するとともに、市民がこうした活動に出会う機会づくりや次世代を担う人材の育成に取り組みます。

❷
「仙台を知り、磨き、仙台オリジナルの発信につなげる場」

【施設全体】
○　３．１１に想いをいたし、その記憶・経験を次の世代へつなげていくための取組みを、文化芸術の手法も取り入れながら行います。
○　災害をテーマとした作品創作、文化芸術を介して災害文化の普及・定着を図るといった「文化芸術×災害文化」の企画を、両分野に携わる市民の力も生かしながら推進します。
○　アウトリーチ活動などを通じて新たなコミュニティの形成に寄与し、地域のレジリエンス※を向上させます。
　⇒参考：文化的コモンズ（共同利用地）の形成について

※レジリエンス…弾力・弾性・回復力の意。困難な事態に直面した時に、状況に適応したり立ち直ったりする力のこと。

【音楽ホール】
○　仙台には「楽都」「劇都」としての官民双方の取組みの蓄積があり、震災復興過程をはじめとする社会の様々な場面で文化芸術の力が発揮されてきた実績もあります。こうした蓄積を多くの人と共有し、より一層磨き上げ、この施設ならではの創造発信を行い、さらにそれを社会へとつなげていきます。
○　仙台の歴史や東日本大震災の経験といった「地域固有のもの」を文化芸術の切り口で捉え、独自性のある創造発信につなげていきます。

【中心部震災メモリアル拠点】
○　過去の災害とそれらが及ぼした影響や防災環境都市の歩みを知り、学べる拠点を目指します。
○　市民自らが災害文化に関する活動に携わり、発信する仕組みづくりを行います。

❸
「ネットワークを形成し、市内外から人が訪れたくなる場」

【施設全体】
○　青葉山エリアの各種施設・機関と連携し、相乗効果による新たな魅力創出により、エリアの価値向上を図ります。
○　都心部の商業施設や飲食店等との連携、災害に関して学ぶ沿岸部とのルート確立など、エリア外との回遊性の向上に資する取組みを行います。
○　複合施設の交流と創造の取組全般を通じて、広域から人を呼び込める魅力・価値を創出し、交流人口・関係人口の拡大につなげるとともに、市民のシビックプライド※を醸成します。
　⇒参考:交流人口･関係人口の拡大に向けた好循環の実現について

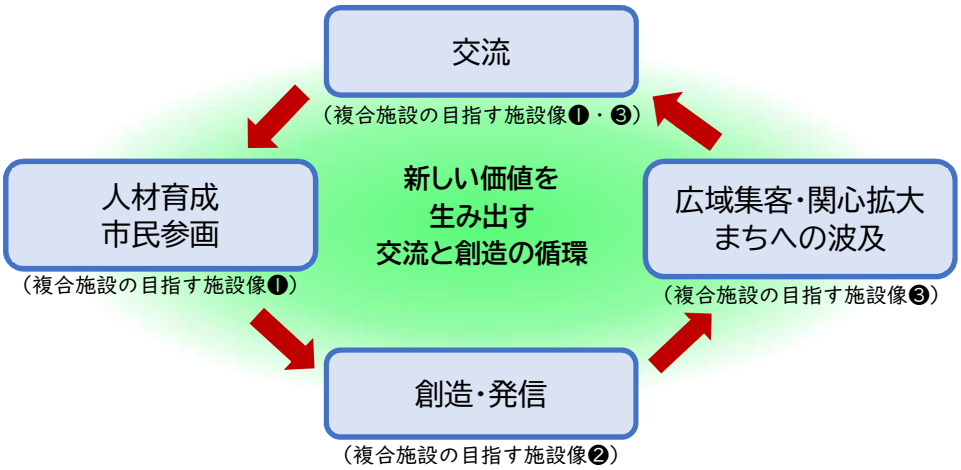
【音楽ホール】
○　全国の主要文化施設との連携のもと、優れた実演芸術作品の創作・上演の場となり、地方から我が国の文化芸術を盛り上げる存在となります。
○　地域内で様々な連携体制を構築し、まちの活性化や文化芸術の振興を図ります。

【中心部震災メモリアル拠点】
○　本市沿岸部や被災各地のメモリアル施設・機関と連携し、伝承活動等の知見を共有するとともに、次の災害に備える仕組みの構築を目指します。
○　災害関連分野のみならず、社会生活の各分野と災害文化を鍵として協働し、成果を広く発信する拠点を目指します。

※シビックプライド…自分たちが暮らしているまちに対する市民の愛着と誇り。

目指す施設像❶～❸を、それぞれ独立した考え方ではなく相互に連関するものと捉え、施設の一連の取組みによって「多様な人々が集い、交流し、創造活動に参画し、魅力的な発信を行う。そのことが施設に人を惹きつけ、さらなる交流を促す。」という好循環を実現させ、都市に新しい魅力、価値を生み出すことを目指します。

このことが基本理念に掲げる「人・文化・まちを育む」を具現化するものになると考えています。



【施設の名称の検討】

複合施設としての基本理念・施設像を踏まえ、適切な施設名称のあり方について今後検討を進めます。

4. 連携･協働事業の推進

音楽ホールと中心部震災メモリアル拠点それぞれの特性やノウハウを融合させ、新たな形の創造事業、双方の分野にとってメリットが生まれる事業など、本施設ならではの連携・協働事業を実施していきます。

【連携･協働事業の例】

○　仙台の歴史、文化芸術の歩み、災害の記憶など、地域に根差した事柄をリサーチし、創造発信を行い、将来に向けた仙台の資源としていく。（音楽ホール「創造」事業）

○　文化芸術の側面から３．１１に想いをいたす事業を実施する。（同上）

○　災害文化創造拠点としての取組みとも連動しながら、新たなコミュニティの形成に寄与し、地域のレジリエンスを向上させる。（音楽ホール「発揮」事業）

○　東日本大震災時の経験を踏まえ、災害時の文化芸術活動のノウハウの継承・発展を図る。今後大きな災害が起きた場合には、文化芸術による復興支援の仙台における中心拠点となるとともに、他都市で災害が起きた場合にも適切な支援を行う。（同上）

○　施設に足を運ぶことが難しい人々のところへ出向いて文化芸術の体験機会を提供する、アウトリーチ事業を行う。災害文化の普及を含む、地域コミュニティの発展・活性化にも寄与することを目指す。（同上）

○　災害の記録や記憶が伝わり、災害文化の定着に繋がるような企画を、文化芸術の手法も取り入れながら実施する。（中心部震災メモリアル拠点「認知」事業）

○　メモリアルコンサートの実施等により、３．１１の経験と想いを未来に継承し続ける。（中心部震災メモリアル拠点「実装」事業）

○　防災や環境、まちづくり、多文化共生、音楽や演劇など多様な活動を行う市民団体が集い、互いの活動を知り、新たな反応や連携を生む企画を実施する。（同上）

○　文化芸術を含めた様々な分野から、災害文化を具現化するものや災害文化の普及に資する作品や技術、製品、デザイン等を選出し表彰する。（中心部震災メモリアル拠点「発信」事業）

○　国際機関や研究機関と連携し、文化芸術も含めた災害文化の意義を世界に発信する。（同上）

これらの事業を効果的に実施するとともに、分野を超えた人的つながりやさらなる事業展開のアイデアが生まれるよう、文化芸術・災害文化双方の分野の人材が参画する推進体制を構築します。

5. 開館までの事業のあり方

本複合施設が完成するまでの間、以下の観点のもと各種の取組を実施していく必要があります。

○　本施設が目指す３つの施設像「多くの人が訪れ、交流し、新しい価値を創造する場」、「仙台を知り、磨き、仙台オリジナルの発信につなげる場」、「ネットワークを形成し、市内外から人が訪れたくなる場」を実現させていくためには、多くの方々に本施設への関心を持っていただくとともに、様々な関係性を構築していくことが重要になります。

○　本複合整備の契機となった東日本大震災からすでに 12 年が経過し、今後も記憶の風化は進んでいくものと考えます。「災害は忘れたころにやってくる」からこそ、日常生活に災害への備えを定着させるとともに、定期的に家庭や地域、社会全体で災害を考える機会を設けることが重要です。そのため、中心部震災メモリアル拠点が担うべき事業は、施設の完成を待つことなく先行して実施する必要があります。

○　さらに、文化芸術と災害文化が触れ合い、相乗することで生まれる新しい価値を仙台オリジナルのものに高め、市民のものとしていくための取組みも求められます。

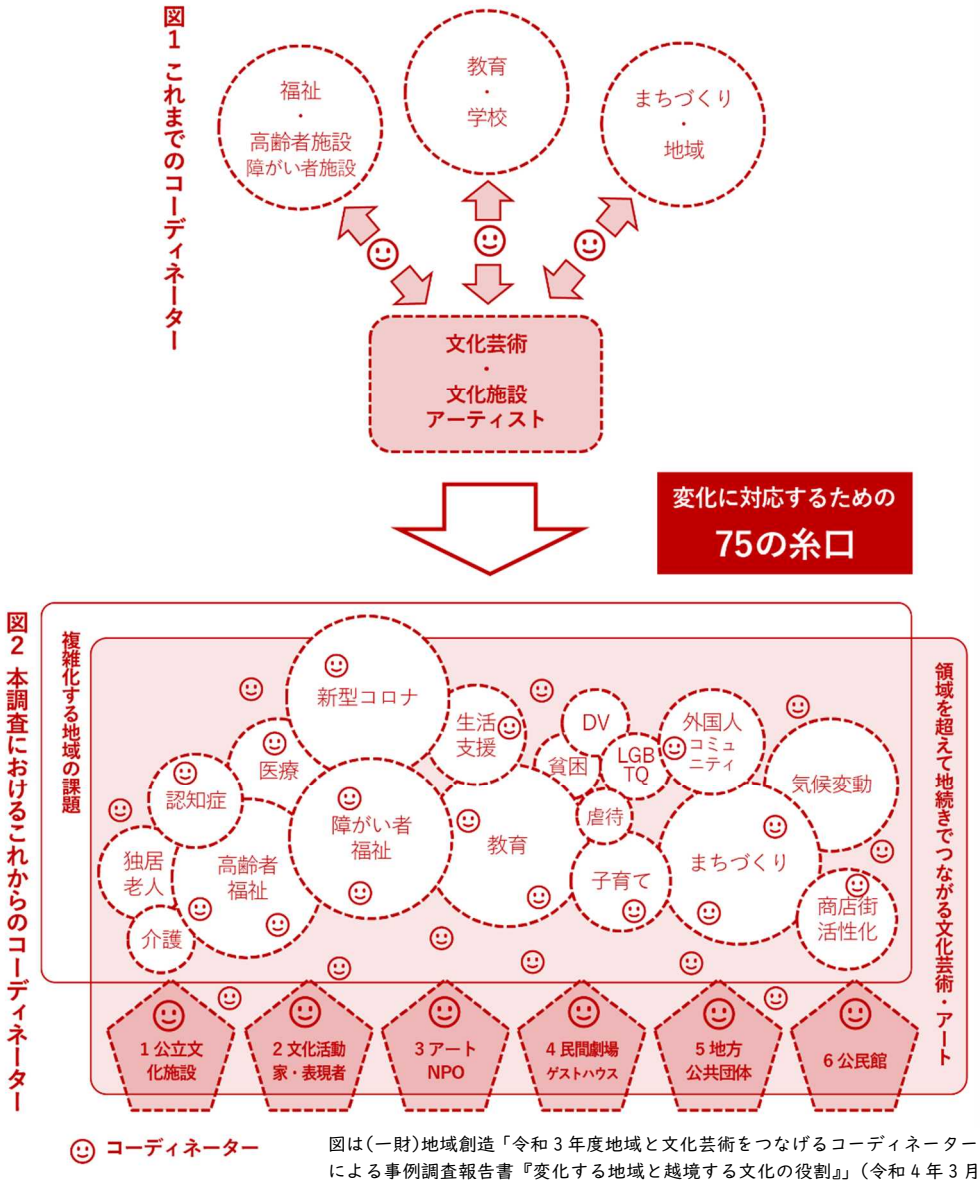
○　こうしたことから、 施設開館に先行して、文化芸術・災害文化に関係する多様な主体と協働しながら、地域の様々な場所に出向いて事業を展開していくこと、各地の文化施設・災害伝承施設や各種機関とのネットワーク構築を進めることが大切です。

これからのコーディネーター像について

○　文化政策の分野においては、文化芸術の力を他の政策領域に生かす取組みの鍵として、「コーディネーター」の存在が注目されています。

○　一般的に、コーディネーターは、文化施設・アーティストと地域、学校、福祉施設などを結びつける役割と捉えられてきましたが、(一財)地域創造が令和３年度に発行した調査報告書「変化する地域と越境する文化の役割」においては、「文化芸術と他の政策領域や行政課題を地続きのものとして捉え」、「間に立って相互をつなぐという立ち位置ではなく、文化芸術を起点にさまざまな活動領域に越境し、それぞれの地域に根を下ろして多様で幅広い活動を展開」するという、新たなコーディネーター像が示されています。

○　文化芸術と災害文化の両分野が連携・融合し、地域の様々な領域と有機的に結びついていくことを目指す本施設としては、ここに記されたような役割を担う存在が施設の内外に育ち、活躍することが重要であると考えます。



図は(一財)地域創造「令和３年度地域と文化芸術をつなげるコーディネーター　インタビューによる事例調査報告書『変化する地域と越境する文化の役割』」(令和４年３月）より

文化的コモンズ（共同利用地）の形成について

○　東日本大震災の後、文化芸術を紐帯とした人々のつながりが、苦しい状況を乗り越え、前に向けて歩みだすためのエネルギーになったという事例は多く見られます。

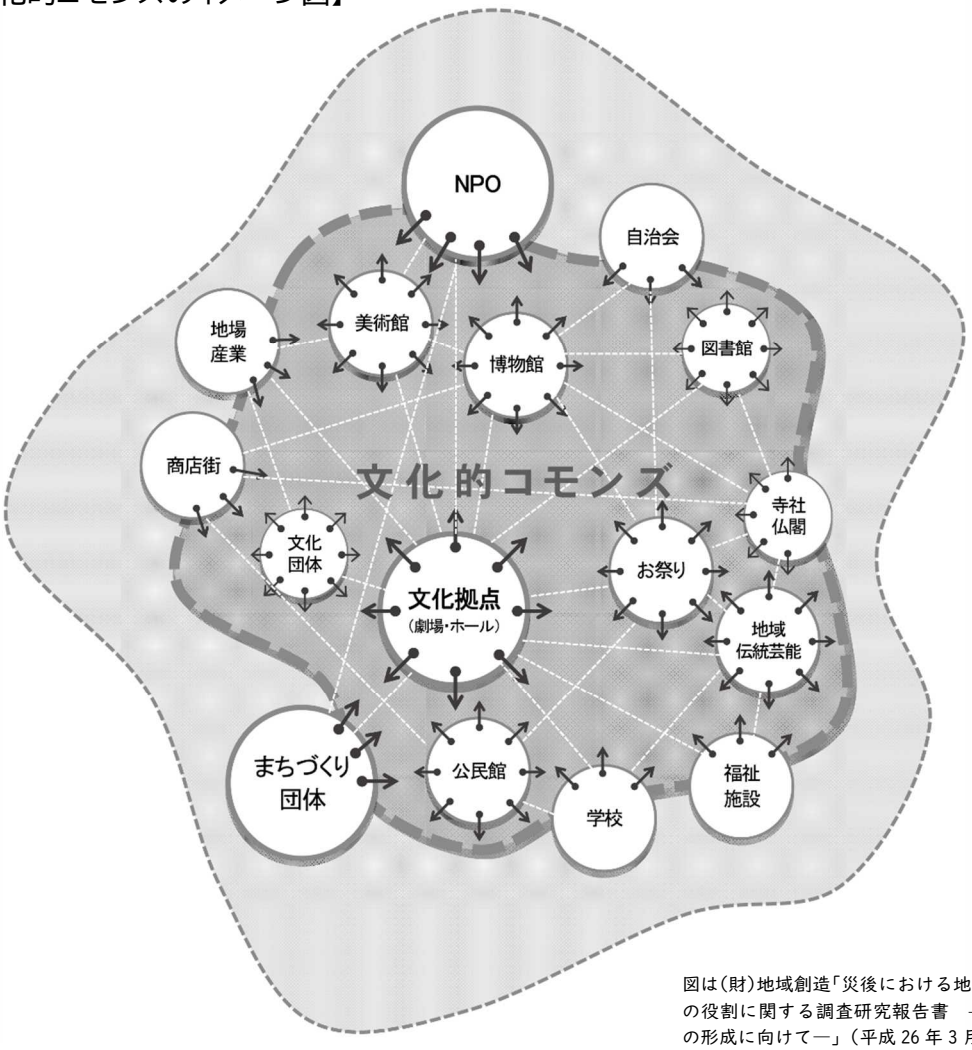
○　東日本大震災の被災地における事例調査を基に平成 26 年に発行された（財）地域創造※の「災後における地域の公立文化施設の役割に関する調査研究報告書　―文化的コモンズの形成に向けて―」では、多様な主体が相互に関わりあうことで形成される、地域の共同体の誰もが自由に参加できる入会地のような文化的営みを「文化的コモンズ」と呼び、公立文化施設はその形成を牽引する役割を担うべきであるとの提言がなされました。

○　また、同報告書では、文化拠点には「記憶」を保存・共有し「共感」を創造・発信するための装置であることが求められていると言及されています。

○　このような文化的営みから生まれる新たな関係性やコミュニティは、将来、災害など困難な状況に直面した際にも、大きな力を発揮すると考えられます。文化芸術・災害文化双方の拠点である本施設が、大切にしていくべき視点であると言えます。

※法人名は発行年当時。現在は（一財）地域創造。

【文化的コモンズのイメージ図】



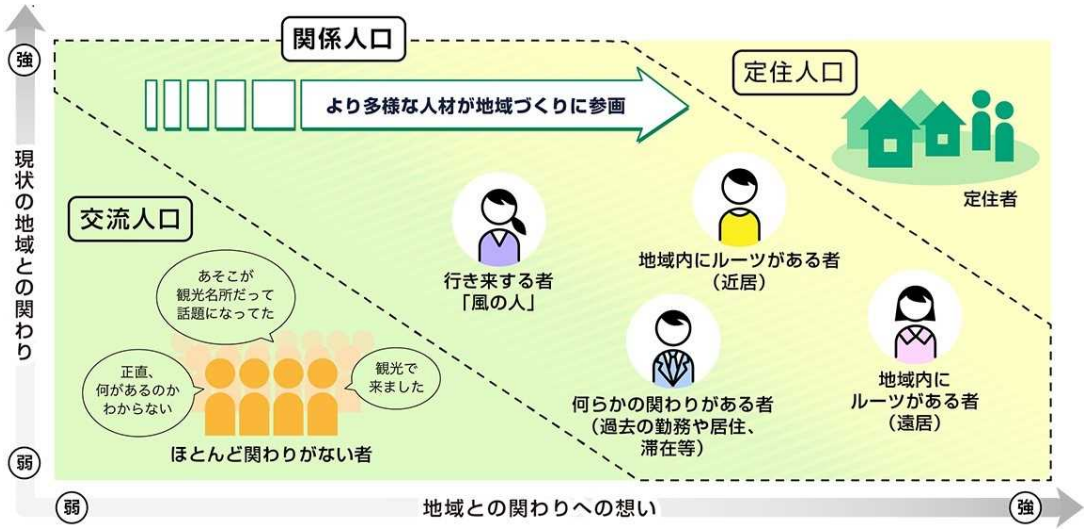
図は（財）地域創造「災後における地域の公立文化施設の役割に関する調査研究報告書　―文化的コモンズの形成に向けて―」（平成 26 年 3 月）より

交流人口・関係人口の拡大に向けた好循環の実現について

○　本施設で展開される多様なコンテンツは、市内の人々に体験や学びの機会を提供するのみならず、市外から多くの人々を呼び集め、交流人口の拡大による地域への経済波及効果をもたらすことが期待できます。

○　さらに、文化芸術および災害文化の拠点として人的交流を重視する本施設は、「関係人口」の拡大に大きく貢献することができるものと見込まれます。

○　「関係人口」とは、「交流人口」と「定住人口」の間に位置し、多様な形で地域と関わりを持つ人々を指します。作品の創作や文化芸術の大会などを通じて地域を超えたアーティスト同士の結びつきが生まれたり、災害の記憶に触れることで共感や応援の気持ちが芽生えたり、様々なプロジェクトにボランティアやスタッフとしてつながったりと言った、一過性の来訪にとどまらない持続的な関係性が構築され、仙台をより豊かなものにしていくことが期待されます。



※図は総務省「関係人口ポータルサイト」より